

川に関わる信仰の地形

— 四万十川流域を対象として —

はじめに 河川は大地を削り、区切り、土砂を堆積させ、様々な地形を造ってきた。山々や溪谷、扇状地、段丘といった地形から、河川内の瀬や淵などの微地形まで多種多様である。そうした地形の中で特に、人の意識を集め、信仰の対象となった「小丘」と呼べる地形がある。

集落から眺められる円錐形の印象的な山やこんもりと茂った小丘はそれぞれの場所で人びとに神を感じさせ、信仰の対象となってきた。こうした小丘に対する信仰は神奈備信仰として古くからみられ、その代表としては大和の三輪山が挙げられる。また社殿を取り囲むように維持されている鎮守の森も、小高く盛り上がった森そのものが神の坐す場所であると考えられていたことに起因している。なお、こうした小丘の樹林は伐採などを免れたため、その地域の本来の植生（原植生）を残していると考えられているものもあり、その土地本来の植生を知る希少な例となっていることも多い。

本稿では、四万十川流域の大きな特徴である穿入蛇行¹⁾により形成された小丘地形を対象に、その地形と土地利用との空間的・景観的な関係を考察したい。

小丘地形の成立 穿入蛇行する河川では、洪水時などに湾曲部と湾曲部が接近した頸状部で切断が生じ（頸部切断）、河川は短絡された新たな流路を通るようになる。その際、支尾根から切り離され独立した小山が形成される。これを「環流丘陵」と呼ぶ。その成因から平面形はイチジク型をしていることが多い（図62参照）。

また穿入蛇行をなす河川において、支流の一部が本流と極めて近接して流れている場合、流量の増加等により

側刻作用が働き、以前の合流点より上流で本流に合流するようになることがある。こうして生じた支流の旧流路と本流との間には、支尾根から切り離された独立丘が残され、これを「貫通丘陵」と呼ぶ。

四万十川流域では、四万十川本流の中流部や第一支川梶原川の中流部においてこれらの地形が多くみられ、環流丘陵は計12地区で、貫通丘陵は計3地区で確認された（表10）。このうち、No. 2、5、14は1地区内に新旧二つの小丘が並んで形成されているものであるため、小丘としては合計18例が得られた。

小丘地形の土地利用 切断によって取り残された旧流路には比較的明瞭な河道跡が残り、そうした旧流路は馬蹄型の安定した平坦地となっている（図63参照）。旧河床部は主に水田として利用され、山裾に民家が立地する。その背後の緩斜面地を畑地や墓地として利用し、小丘の山頂や麓に社堂が設けられるという土地利用が基本的な構造である。集落形態は散在型である場合と集居型である場合とがあるが、これは旧河道部の微地形と水利環境の違いに起因するものである。町の中心部に近いNo. 4、10では土地の高度利用が進み、旧河道部には多くの住宅が立地するほか、小丘部分には工場や学校が所在する。

社堂の立地 四万十川流域で確認された18例の小丘のうち、12例でその山頂や麓に社堂が確認された。ただし同地区内に二つの小丘を有する3地区（No. 2、5、14）では一方の小丘のみに社堂が設けられているため、地区で捉えると15地区のうちの12地区で小丘になんらかの社堂が設けられていることになる。河川と旧河床部に囲まれた小丘は、他から隔絶され独立した山である。人々は定住する過程の中でこの圍繞された空間を信仰対象として意識してきたことがうかがえる。

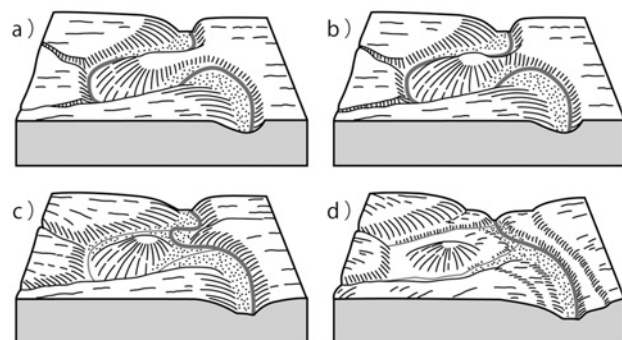


図62 環流丘陵の形成過程（Wagner G. による図を修正）



図63 下津井地区（1998.3、高知県清流環境課）

表10 四万十川流域における小丘地形の特性

	No.	所在地		河川	集落形態	社堂の有無	見えの形		見えの大きさ						
							可視状況	山頂部	小丘部 比高差 (m)	旧河道 部比高 差(m)	丘陵部 面積 (ha)	旧河道 部面積 (ha)	合計面 積 (ha)	山頂と集 落との距 離(m)	俯 角 (°)
環 流 丘 陵	1	津野町	桑が市	四万十川	集居型	河内神社	全体可視型	鈍頂型	30	20	0.92	8.34	9.26	170	10
	2a		下桑が市	四万十川	散在型	文珠堂	全体可視型	鈍頂型	10	20	0.35	3.02	3.37	85	6.7
	2b					なし	全体可視型	扁平型	25	30	0.31	8.05	8.36	85	16.4
	3	中土佐町	伊勢川	四万十川	散在型	金比羅神社	全体可視型	鈍頂型	15	20	0.33	9.22	9.55	110	7.8
	4	梶原町	飯母	梶原川	集居型	なし	全体可視型	扁平型	50	30	3.27	11.08	14.35	210	13.4
	5a		川井	梶原川	散在型	不動尊・大師堂	全体可視型	鈍頂型	20	50	0.21	6.28	6.49	110	10.3
	5b					なし	部分可視型	鈍頂型	110	80	4.37	5.72	10.09	90	50.7
	6	四万十町	下津井	梶原川	散在型	仁井田神社・琴平神社	全体可視型	鈍頂型	80	20	12.94	30.67	43.61	330	13.6
	7		外道	梶原川	散在型	春日神社	全体可視型	鈍頂型	50	110	11.57	16.57	28.14	290	9.8
	8		西の川	梶原川	散在型	河内神社	全体可視型	鈍頂型	30	20	0.4	14.05	14.45	140	12.1
	9		江師	梶原川	散在型	河内神社	全体可視型	鈍頂型	30	60	2.06	34.5	36.56	210	8.1
	10		田野々	梶原川	集居型	なし	部分可視型	鈍頂型	30	10	11.1	33.09	44.19	310	5.5
	11		大井川	四万十川	散在型	大井河神社	全体可視型	鈍頂型	30	60	12.4	78.39	90.79	540	3.2
貫 通 丘 陵	12		下組	長沢川	散在型	なし	全体可視型	鈍頂型	30	30	0.94	3.7	4.64	80	20.6
	13	四万十町	家地川	四万十川	集居型	河内神社	全体可視型	鈍頂型	20	15	1.39	7.64	9.03	110	10.3
	14a		戸口	四万十川	散在型	河内神社	全体可視型	鈍頂型	20	40	1.53	6.56	8.09	200	5.7
	14b					なし	部分可視型	鈍頂型	20	50	0.46	4.43	4.89	150	7.6
	15	中土佐町	寺野	下ル川川	散在集落	森の宮	全体可視型	鈍頂型	15	20	0.2	2.28	2.48	75	11.3

社堂が立地する12例の中には河内神社を祀るものが4例あるほか、大井河神社を祀っている事例もみられることは興味深い。また、川井・下津井・大井川・仁井田などの「井」は水を示す語であり、川や水の神を祭るにふさわしい地名である。一方、金比羅神社や琴平神社は航海安全の神であり、四万十川流域における河川舟運のかつての活況を伝えている。

小丘の見えの形と信仰との関係性 18例の小丘について、集落から見える山姿について分類したものが表10の「見えの形」である。まず可視状況では、視野の中に小丘の山姿すべてが収まるものを「全体可視型」(15例)とし、山裾などの部分が収まらないものを「局部可視型」(3例)とした。また小丘山頂部の状況により「鈍頂型」(16例)と「扁平型」(2例)に分けた。この結果、全体可視・鈍頂型である13例の小丘のうち、No.12を除いたすべての小丘でなんらかの社堂が設けられていることがわかった。一方、社堂の設けられていない六つの小丘のうち、No.12を除くすべての小丘で、部分可視型もしくは扁平型のどちらか一方の要素を持つことがわかった。つまり信仰対象となるには、小山全体が視野の中に納まり、その山頂部が頂状の地形をなしているという見えの形が深く関わっており、より独立した存在として認識できることが重視されていることがわかる。

小丘の見えの大きさとの関係性 これらの小丘地形を定量的に把握するため、地形図から距離や面積、集落から山の仰角を算出したものが、表10の「見えの大きさ」である。まず信仰対象となっている小丘の比高差は平均値20

～50mのものがほとんどで、山自体はかなり低いことが確認された。集落中心部から山頂を見上げた際の仰角は、3.2°～50.7°と様々で、平均値12.4°、標準偏差10.1であった。ただし社堂を有す小丘のみでは仰角3.2°～13.6°、平均値9.1°、標準偏差2.8で、前者に比べて明らかに数値の広がり幅は小さく、一定の特徴を持っていることがわかる。信仰対象となる小丘は大きく仰ぎみなくともその存在を容易に確認できるものが意識的に選ばれているといえる。

おわりに 小丘は、四万十川の蛇行がつくり出した地形特性が基本にあり、そこで人々の暮らしが展開し、さらに小丘の見えの形や大きさといった視覚的な特徴が重層的に関わるなかで流域を特徴づける信仰対象として位置づけられてきたといえる。四万十川流域の文化的景観としての価値をとらえる際、生活や生業のあり方に注目しがちだが、その背景にある地形特性から浮かびあがる信仰的価値も十分考慮する必要がある。また、流域で連続的に見られるこの事例を、地区を越えた流域の一連の脈絡としてとらえなおし、その保存・活用に向けた取り組みを進める必要があると考えている。(恵谷浩子)

註

- 1) 河川の蛇行は「自由蛇行」と「穿入蛇行」の大きく2種類に分けられる。自由蛇行が沖積平野の氾濫原にある河川の曲流を指すのに対し、穿入蛇行は山地内にあり河谷を形成する曲流を指す。この穿入蛇行は、蛇行する河川が流れる平野が隆起したため河川が谷を浸食(下刻作用・側刻作用)するようになり、蛇行した状態のまま河谷を形成して生じたものである。